

資料 Data

大学と地域の連携のための対話術の実践 — 講義における対話型ファシリテーションの導入を通して

石川菜央¹

Facilitating the cooperation between universities and regions: Introduction of meta facilitation in the Taoyaka Program at Hiroshima University

Nao ISHIKAWA¹

要旨: 筆者が担当する、広島大学たおやかリーディングプログラムの講義である地域文化創生論では、大学院の分野融合型教育において、学生が地域と向き合い、課題を見出すために必要な対話の手法を学び、実践する試みを行った。講義で導入したのは、国際協力の対人支援から生まれた対話型ファシリテーションである。本稿では、この手法を講義で導入するために行った工夫や学生への教育効果、課題について分析する。そしてこれらの実践を報告することにより、これからの大学に必要なファシリテーション教育に関する資料の蓄積に資することを目的とする。

キーワード: フィールドワーク、ファシリテーション、地域連携、分野融合型教育、神山町

Abstract: The author has given a multidisciplinary class, “Creation of Regional Culture,” as part of the Cultural Creation Course in the Taoyaka Program at Hiroshima University, Japan. In this class, students learn how to communicate with the local people to facilitate cooperation between the university and the region. The author introduced “meta facilitation,” which was created for international cooperation using trial and error. This study discusses how the author introduced this method to students, the effect of the method, and its future possibilities. The study aims to provide an actual record of the facilitation education, which is needed for the cooperation between universities and regions.

Keywords: fieldwork, facilitation, regional cooperation, multi-disciplinary education, Kamiyama town

I. はじめに

1. 研究の目的と背景

筆者が担当する、広島大学大学院たおやかリーディングプログラム（以下、たおやかプログラムと記載する）の講義である地域文化創生論では、分野融合型教育において学生が地域と向き合い、課題を見出すために必要な対話の手法を学び、実践する試みを行ってきた。講義で導入したのは、国際協力の現場から生まれた対話型ファシリテーションである。本稿の目的は、この手法を講義で導入するために行った工夫や学生への教育効果、課題について分析し、実践の記録を残すことによって、これからの大学におけるファシリテーション教育に関する資料の蓄積に資することとする。

たおやかプログラムは、日本学術振興会によって採

択された博士課程教育リーディングプログラムである。修士課程（D1～D2）と博士課程（D3～D5）を含む5年間一貫教育で、国内外で課題を抱える地域に貢献できるリーダーを育てることを目標としている。文化創生コース、技術創生コース、社会実装コースの3つのコースがあり、文系から理工系まで様々な専門分野の学生が共に学び、活動することに特徴がある¹⁾。プログラムでは、講義を中心に学内で行われるオンキャンパス教育と、地域における現地研修が中心のオンサイト教育が提供される。在籍する学生の国籍は多岐にわたっており、共通言語として英語を採用している。プログラムが提供する講義と研修は全て英語で行われる。

オンキャンパス教育では、座学を中心に、専門分野

¹ 広島大学文学研究科（たおやかで平和な共生社会創生プログラム）: Graduate School of Letters, Taoyaka Program for creating a flexible, enduring, peaceful society, Hiroshima University

やオンサイト教育での活動に必要な知識を学ぶ。本研究で対象とする地域文化創生論は、オンキャンパス教育における基礎的な講義の一つであり、主に1年生(D1)や2年生(D2)が対象である。オンサイト教育では、日帰りから10日間ほどの現地研修が段階的に行われるほか、3年生(D3)から4年生(D4)の間には、約1年かけてチームごとに一つの地域と関わり、その地域が抱える課題の解決に貢献するためのオンサイトチームプロジェクトを学生が計画し実施する。

筆者は、文化創生コースの特任教員として、オンキャンパス教育・オンサイト教育の講義や研修に関わってきた。その中で感じたのは、オンサイト教育では、地域と協働してプロジェクトを行うという高度な地域との関わりが必要な反面、オンキャンパス教育における各コースの専門分野に関する講義では、現地での具体的な活動の方法まではサポートしきれない点である。地域において課題を見つける方法や、住民とのコミュニケーションの取り方などについて、体系的な知識を与えられる機会が少ない。

そこで筆者は、2014年度より担当している地域文化創生論の講義において、フィールドワークについての入門的な内容を扱い、オンキャンパス教育とオンサイト教育の橋渡しをしようと試行錯誤してきた。2015年度には、多国籍の学生が言語の制約がある中でフィールドワークの体験をするための工夫を行った(石川, 2016)。そこでは、日本語が話せない学生も参加できるように、フィールドワークの中でも観察を中心に据え、テーマを設けて写真を撮り、チームでポストカード作りなどを行った。特に講義における教員と学生、学生同士の相互のやり取りを重視し、多国籍の学生がそれぞれの背景や価値観を紹介し、理解し合うことを積極的に行った。2015年度の実践によって、地域の文化を理解することの重要性を受講生の間で共有できるように導けば、母語が異なっても英語で互いの文化を尊重しながら理解したり、グループワークによって各自の得意な点、苦手な点を相互に補完し合えることが分かった。

そこで、2016年度は2015年度の講義内容を受け継ぎつつ、より実践的な内容にすることを目指して、地域において活動をする上で必要な、地域の住民とのコミュニケーションの仕方を学び、練習する機会を与え、学外においても学生がこの対話術を使えるようになることを目標とした。大学教育において国際化が進む現在では、日本語に堪能でない学生や、多国籍の学生と一緒に学ぶ機会が増えており、言語や価値観の違いを配慮した上で講義を行うことが求められる。本稿では

そうした特徴を持つ講義を対象とすることで、同じような対応を迫られる教育者に実践のヒントを与えることを目指す。

2. 対話型ファシリテーションの位置づけ

課題を見つけることに関して、近年ではファシリテーションという技法が注目されている。ファシリテーションとは、ものごとを楽にする、手助けする、促進するという意味の動詞の *facilitate* から来ており、森(2004)は「人と人との相互作用を活発にし、創造的なアウトプットを引き出すもの」と定義している。中野ほか(2009)はファシリテーションの機能の例として、組織や地域のメンバーがある決断をすることを容易にしたり、クラスの生徒が学ぶのを助長したりすることを挙げる。また、決断を下したり学んだりするのは参加者であり、それを支援するのがファシリテーターの役割であるという。

ファシリテーションは、コミュニケーションが必要なさまざまな場面での応用が試みられている。ビジネスでは、組織の生産性を上げたり(森, 2004)リーダーシップを開発したりする場面(グロービス, 2014)などでの有効性が指摘されている。また、地域づくりや教育の現場においても、住民や子ども、学生などを対象に様々なファシリテーションが行われている(中野ほか, 2009)。

学生が地域の課題の解決に向けて活動する際には、やり方によっては、地域に悪影響を与える危険があることにも自覚的にならねばならない。そこで本研究で着目するのが、和田・中田(2010)による対話型ファシリテーションである。これは、1993年に設立された特定非営利活動法人ムラのミライが、南アジアや日本などを中心に地域づくりを支援してきた中で確立した対話の手法である。形だけの援助や不要なばらまきに陥る危険を回避するために、いかにして現地の人々と対話をし、課題を見つけ、共に解決策を見出していくのかに力点が置かれている。

この手法の特徴は2つある。1つ目は現実を構成する要素を、事実・感情/気持ち・観念/考えの3つに分けることである。これは対話を通して現状を把握する上で、質問者と回答者の認識のずれや思い込みを防ぐためである。2つ目は、現場で起こっている事実を把握するために、何(What)・いつ(When)・どこ(Where)・誰(Who)の4つの疑問詞を中心にした事実質問を行い、相手の感情や考えを聞かせず(Why)やどう(How)を避ける点である(中田, 2015)。和田・中田(2010)によれば、NGOワーカーや研究者など

の立場の人物が村に入り「なぜ～がないのですか？」「どうして～できないのですか？」といった質問をすると、相手に恥ずかしさや圧迫感を与え、「お金がないから」、「設備がないから」などと、外的な要因に結び付けた答えを誘導してしまう。それを言葉通りに受け取って解決策を講じても根本的な解決にはつながらないというのである。

II. 講義における対話術の実践

1. 講義の構成と対話型ファシリテーションの導入

2016年度の講義の柱として(1)フィールドワークに関する基本的な事項を伝える、(2)地域の活性化の方法や考え方を事例から学ぶ、(3)地域の方との関係作りの基礎となる対話の方法を学ぶ、の3つを設定した。

講義の受講生は11名で、コース別には、文化創生コースが3名、技術創生コースが5名、社会実装コースが3名であった。国籍別には、日本3名、インド3名、ベトナム2名、中国1名、アメリカ1名、イタ

リア1名であった。他のたおやかプログラムの講義と同様に、講義や対話の練習は英語で行った。

対話型ファシリテーションに関しては、和田・中田(2010)の英訳“Reaching Out to Field Reality—Meta Facilitation for Community Development Workers”(Wada and Nakata, 2015)が出版されており、第一部「メタファシリテーションの成立」を受講者全員で輪読することとした。

講義では、複数のパターンで対話の練習の機会を設けたほか、対話型ファシリテーションと共通した考え方をもとに地域づくりをしている事例を紹介するなどの工夫を行った。

2. ペアおよびグループワークにおける練習

講義では、中田(2015)で紹介されている基礎練習を参考に3つの練習を行った。1つ目は、相手のことをよりよく知ることを対話の目的として、相手のカバンやポケットに入っていたものから1つを選び「これは何ですか?」という質問から始めて、事実質問を

表1 1回目のペアワーク「これは何ですか?」を実践した際の気づき

学生	選んだもの	質問をした時に気付いたこと	質問に答えた時に気付いたこと
1	リンゴ／ペンと米	最初は考えないと質問ができなかったが、話が進むにつれて、会話がスムーズになり、面白くなってくると、もっと情報を得ることができるようになった。	ゆっくりと回答しながら、段々と自分のことを話せるようになった。情報を集めながらの会話は興味深い。質問自体は、とても基本的でシンプルだと感じた。
2	携帯電話／筆箱	「～は好きですか」といった感情を聞く質問を避けたり、未来の計画を尋ねるのが難しかった。質問をスムーズに続けるのが難しい。	会話は明るくて親しみやすい雰囲気だったので、質問に答えやすかった。
3	櫛	相手が丁寧に答えてくれたので前向きに質問をできた。Whyを使わないことで相手は居心地が良さそうだった。	相手が数について質問してきたので、具体的な数を応えれば良いだけだから楽だった。でも、どれくらい詳細に数を知りたいのか分からなかったので、答えるのが難しかった。
4	毎日の行動／研究室のIDカード	何かを知りたい時に具体的な情報を得られるのは良かったが、相手が意見を自分に伝えたい時に、自分が何と言って質問するべきか分からなかった。	事実質問に答えるのは、聞かれたことにだけ答えれば良いので、とても簡単だった。でも、質問されていないことを話したい時にどうすれば良いか分からない。
5	名刺入れ／USBドライブ	何を知りたいかで質問の仕方にも色々あると感じた。今回は、例えば、相手の経歴、研究内容、名刺の印刷ができる所、名刺にある相手の名前の由来などを知ることができた。	相手は、いくつかの情報を知りたがった。働く前に何をしていたか、今勉強していること、チームプロジェクトで何をしたいか。聞かれると正直に答ええないといけないと感じた。
6	携帯電話の飾り／携帯電話	事実質問のルールに従って会話を続けるのは大変だった。相手が飽きないように次々とトピックを変えなければならなかった。そのおかげで相手の生活や趣味などが聞けて良かった。	質問はシンプルで長い間考えなくても答えられるので気が楽だった。
7	修正テープ	これまで修正テープのちゃんとした使い方を知らなかったなので、どうやって使うのかを聞いた。とても役に立ったので、自分も買おうと思う。	自分の持ち物について相手に話すのは楽しかった。
8	キーホルダー／ペン	相手のことを知りたいという態度を取ることが重要だと感じた。質問を見つけるのに苦労した。	自分自身に関する質問は答えやすかった。質問する方が答えるよりも難しい。
9	買い物／食べ物	食材が異なるので、日本で本格的なインド料理を通るのは大変だと思った。	柿について話した。柿はインドにはない。日本とは異なる柿について答えることができた。

注) 学生の小レポートより抜粋。レポートは英語で書かれており、筆者が日本語に翻訳した。本文で取り上げた部分を筆者が太字で示した。

繋げていくペアワークである。対話において事実質問を発することに慣れることと、その難しさを体感することを狙いとした。学生が質問をした際の感想としては(表1)、事実焦点を当ててスムーズに会話を進めることの難しさを挙げた意見が多かった(No.1, 2, 6, 8)。また、whyを使って質問をしないことで相手が居心地が良さそうだと感じた学生もいた(No.3)。一方で、質問に答えた時に感じたことは、事実を淡々と答えていけば良いので気持ちが楽だとの意見が多く見られた(No.1, 4, 6, 8)。また、質問をする側と答える側の双方を経験して、質問をする方が答えるよりも難しいと感じた学生もいた(No.8)。対話型ファシリテーションにおいて、聞き手にはより多くの思考が求められる一方で、答え手にとっては負担が少ないことを学生が体感できた。

2回目のペアワークでは、時系列で相手のことを尋ねるという練習を行った。時系列で聞くことは、相手が抱えている問題について語り始めた時、それが本当に解決すべき問題なのかを確認したり、その問題の背景を具体的に語ってもらったりするのに有効である。

最近に問題が起こった時点を始めとして、現在から過去に向かって相手に話してもらう方向と、問題が最初に起こった時を起点として、過去から現在に向かって話してもらう方向の2つの方向がある(中田, 2015)。講義では、聞き手と答え手に分かれ、たおやかプログラムに入学するまでをテーマとして、相手の経歴について現在から過去、過去から現在のどちらかで聞き進めるといった課題を与えた。

学生からのコメントとしては(表2)、時系列に沿って進めることでスムーズに対話を展開できたようである(No.1, 3, 4, 5, 7)。話が弾んだ反面、質問をされる側に立ってみると聞かれた以上に話したくなるという自身の反応を振り返って、今後の調査などで聞き手の側に立った時に、話し手が同じように反応する可能性があるという指摘する学生もいた(No.3)。1回目の練習では事実を聞く質問の仕方に戸惑った学生も多かったが、2回目の練習では、時系列で行う対話を楽しんだり、もっと相手のことを知りたいと感じた学生も見られた。

3回目の練習では応用編として改めたい習慣について

表2 2回目のペアワークで時系列に沿って対話をした際の気づき

学生	流れ	質問をした時に気付いたこと	質問に答えた時に気付いたこと
1	過去 ↓ 現在	相手と心地よく話すことができ、戸惑うことはなかった。リラックスして話すことができ、相手は経験と共にその時に何を感じたのかを聞かせてくれた。	相手の質問に答えるのは簡単だった。自分と相手と同じ国の出身でコミュニケーションがうまく取れるからだと思う。
2	過去 ↓ 現在	知っている相手に質問をすることは気が楽だった。とても得るところの多い対話だった。	知っている相手なので、質問に答えたり自分のことを話したりすることは簡単だった。
3	現在 ↓ 過去	現在から始めて、過去にさかのぼって質問をした。最近のことが思い出しやすいので、この手順は良かったと思う。また対話の場の雰囲気も関係すると感じる。	自分は過去から現在に向けて質問を受けた。聞かれた以上に自分の背景を話したくなった。インタビューをする時に相手に関係ないことを話し始めて困ることもあるかもしれない。会話の始めよりも終わりの方が個人的な事項や気持ちを話しやすかった。
4	現在 ↓ 過去	現在のことは過去の事よりも答えやすい。現在の答えやすい事項から過去に向かっていく方がやりやすいと感じる。	相手は過去から現在の型で聞いてきた。現在のことと比べると過去のことは思い出しにくい。時系列に沿って答えるのは簡単だった。
5	過去 ↓ 現在	楽しかったが、たくさんの質問が頭に浮かんで戸惑った。	自分の経験と記憶にもとづいて答えるのは心地よく、のびのびと答えることができた。
6	過去 ↓ 現在	日本人の学生に質問をするのは少し緊張した。会話が始めると楽しむことができた。	相手が興味深い質問をしてくれるので楽しかった。
7	現在 ↓ 過去	会話を通して相手と親しくなれ、もっと相手のことを知りたいと思った。	相手が自分に関心を持ってきているようでうれしかった。
8	過去 ↓ 現在	家族、教育、宗教、結婚、学校、未来の計画などたくさんのことが分かった。宗教に関しては聞いてよいものかためらいもあったが、インドの宗教は文化や社会関係、日常生活に反映されていることを知った。	自分の考えや意見をのびのびと話すことができた。遠慮のない答えにくい質問はなく、もっぱら自分の受けた教育や未来の計画、将来の仕事についての考えなどを話した。

注) 学生の小レポートより抜粋。レポートは英語で書かれており、筆者が日本語に翻訳した。本文で取り上げた部分を筆者が太字で示した。

て3人でグループワークを行った。聞き手、答え手、オブザーバーの役割を交代しながら行い、オブザーバーは対話を見守り、適宜アドバイスをした。中田(2015)が指摘するように、話し手が自ら重要な発見や気づきをすることが重要なので、聞き手は、アドバイスや提案をせず、相手の課題の分析を助けることに徹するように指示した。

学生からは(表3)、whyと聞かないことや提案やアドバイスをせずに、相手の課題の分析を促すのが難しいという声が多く聞かれた(No.3, 4, 5, 7, 8)。一方で、こうした状況を乗り越える方法として、「会話が行き詰った時には具体的な数や状況を聞くと良い」(No.4)、「自分が同じ状況にあることを想像したらさらに質問が出た」(No.5)、「解決策を考えられない時も、そのトピックについて注意深く問いを続けることが重要だと感じた」(No.6)など、活路を見出そうとする工夫も見られた。

このように、練習1から3にかけて、段階的に練

習の機会を提供した。その中で、対話型ファシリテーションの有効性と難しさ、練習の必要性などを学生に考えさせることができた。

Ⅲ. 対話型ファシリテーションの活用

1. ゲストへのインタビュー計画と実施

輪読やペアやグループでの練習を行いながら、実際に初対面の相手にインタビューをする機会を設けた。対話型ファシリテーションが目指している固定観念を排除して地域の課題と向き合うという点について、これと共通する考え方で地域づくりをしている、徳島県神山町を紹介した。神山町は、いわゆる過疎の町であるが、認定NPO法人グリーンバレーの20数年にわたる活動が功を奏し、関東のIT企業がサテライトオフィスを設けたり、若者が続々と移住して起業したりと、新しい活動が活発に行われている。近年では、地域づくりのモデルケースとして取り上げられることも多い(NPO法人グリーンバレー・信時, 2016)。講義

表3 3回目のワーク「改めたい習慣」を実践した際の気づき

学生	トピック	質問をした時に気付いたこと	質問に答えた時/対話を観察して気付いたこと
1	寝すぎて遅刻してしまう	相手があまり情報を言ってくれないからか、自分が難しい質問をしているからか、対話を続けるのが難しかった。別の事実質問によって、トピックを変えてみた。	相手が対話を続けようとしたことはファシリテーションとして良かった。
2	健康のため運動をしたい	次の質問をするのが難しい時があったが、対話が進むにつれて面白くなった。	whyと聞かないだけでは行き詰った状況を変えるのは難しい。
3	ゲームをする時間を減らしたい	whyと聞かないことはとても難しい。また、提案をしないことも難しい。次の質問を思いつづののも簡単ではなかった。	質問をされているうちに自分で答えを見つけられたのは良かった。感情ではなく、事実を聞く質問をもっとファシリテーターができることより効果的だと感じた。
4	効率的な時間の使い方をしたい	質問をすることがとても難しかった。質問をする時、提案やアドバイスをしなくなった。相手とその事項に関して分析するのを手助けできなかった。	相手がHow longやHow manyなどの質問をする時と答えやすかった。会話が行き詰った時には、具体的な数や状況を聞くと良い。
5	髪形を早く整えたい	習慣について事実質問で聞いていくと、それ以上聞くことがなくなって行き詰った。でも自分が同じ状況にあることを想像したらさらに質問が出た。もう一つ難しいのは、提案をしなくなることだ。	相手が感情や認識を聞くことを減らすことで、答える側は、自分で気づくように導かれると感じた。もっと効果的にするには練習をたくさんして、寄り道をせずにトピックの解決に向けて集中することが大切だ。
6	部屋が散らかる前に整頓したい	忙しすぎて、部屋を片付けられない。提案をすることも、相手に問題が何か悟らせることも難しかった。	問題について、何も解決策を考えられない時も、そのトピックについて注意深く問いを続けることが重要だと感じた。
7	課題に締切りぎりぎりまで取り組めない	次の質問を考えることと、提案をしないようにすることが難しかった。質問を考えるのに精いっぱい、回答者が自らの課題を分析するのを手伝うことができなかった。	同じ国の出身者だと課題の背景が簡単に分かるので、お互いに理解しやすいと感じた。
8	スマホをいじる時間を短くしたい	次の質問を考えたり会話を続けるのが難しかったが、相手が悩みを打ち明けてくれてうれしかった。	聞く時には、質問の目的をしっかりと把握するべきだと思った。もっと自信を持って進めて良いと感じた。また、相手との良い関係を築くことも大切だと思った。

注) 学生の小レポートより抜粋。レポートは英語で書かれており、筆者が日本語に翻訳した。本文で取り上げた部分を筆者が太字で示した。

では、不利な立地など、変えられない条件は受け入れた上で地域の未来を考える、著名なアーティストを誘致することはできないが、アーティストが活動しやすい場所作りで勝負する、仕事がないから若者が減るといふならば、仕事を持った若者を誘致する（大南、2016）といった、グリーンバレーが考え出してきたこれまでの地域づくりで直面した困難を乗り越える発想の転換を紹介した。そして、神山町に若者が移住するきっかけの一つとなっている厚生労働省の職業訓練を利用した半年間の滞在型人材育成事業である神山塾の塾生1人を講義に招待し、学生のインタビューに答えてもらうことにした。

準備として、まずは2回の講義にわたって神山町や神山塾、招待する神山塾生のUさん（30代女性、関東出身）の紹介を行った。そして一人の神山塾生を通して、若者にとって神山に住みたいと思う魅力を探り、他の地域の活性化を考える上でヒントを得ることを目的として、インタビューの計画を立てた。テーマをA「神山に来ることになった彼女の背景を知る（どんな人が移住する可能性を持っているかを知る）」、B「彼女と地域の住民との関係を知る（新しく地域に来た者にとってどのような受け入れ方が心地よいかを知る）」、C「彼女が神山で学んだことと人生への影響を知る（神山はどのような経験を若者に与えるか）」の3つに設定して、質問を考えるチーム分けを行った。一人の塾生の経験に基づくものなので単純に一般化はできないが、まずは対話によって神山の一面を知り、今後のたおやかプログラムで他の地域において活動する際のヒントを得ることを目標とした。対話型ファシリテーションでは、原則として事実を聞く質問だけを行うが、今回は、話し手の感情や考えを聞くことも参考になると考えた。ただし、事実、感情、考えのどれについて質問をしているのか意識することは重要なので、質問を準備する際には Perception（考え）、Fact（事実）、Feeling（気持ち）のどれを聞いているのかを分類することを課した。

インタビューの当日は、Uさんに講義室に来てもらい、留学生とUさんのやり取りに関しては、筆者とTAが日英の通訳を行った。表4は、学生たちの質問とその分類、質問の狙いや意図、相手から得られた回答、そして対話から学生が学んだことを学生のレポートにもとづいて示したものである。

学生からは、対話で学んだこととして、あらかじめ用意した質問の通りに進むわけではなく、相手の反応を見て質問の仕方を変えたり、追加で質問を行ったりする必要性についての気づきがあったことが分かる

(A-1, A-3, B-2, C-2, C-3)。インタビューでは自分の意図が相手に伝わりにくかったり、予想外の解答が返ってきたりして、対話の流れが大きく変わることもある。そうした生の経験を学生ができたことは収穫であった。

対話型ファシリテーションでは、なるべく聞き手の予想や期待を排除して、事実を淡々と引き出すように質問する。「地域の人々は塾の若者を労働力として期待している」と予想していた学生（C-1）は、それを直接に質問することを避け、塾の具体的な活動内容についてたずねた。その結果、塾の主な役割が町に労働力を提供することではなく、塾生が地域に溶け込めるように様々な機会を提供することであるという発見ができた。事実質問によって、思い込みの質問をせずに済んだため、新しい事実を知ることができた。

一方で、事実質問と考えを聞く質問について、的確に分類できていない例も見られた。例えば、ゲストがしばらく考え込んだ「ホストファミリーや地域は、あなたの滞在でどのような利益を得ますか？」という質問をした学生（B-1）は、これを事実質問に分類し、「考えを聞く質問よりも、事実質問の方が答えるのが大変そうだった」と解釈していた。しかし、単純に家賃を聞くのであれば事実質問となるが、「どのような利益を得るか？」という漠然とした問いには、多分に相手の考えを聞く意図が入っている。相手が答えやすくするためには、質問を具体的に答えられるように複数の質問に分けたり、具体的な出来事を思い出す質問をしたりと、質問の形を変える必要がある。またB-3の「ホームステイ先ではよく会話をしましたか？どのような会話をしましたか？」も、事実質問と分類されているが、よく会話をするかという聞き方は頻度に関して厳密に尋ねているとは言えず、結局は相手の判断を聞くことになる。例えば「今朝、何を話しましたか？」など時間を特定すれば事実質問と分類できる。この辺りは、繰り返しての練習や教員からのフォローが必要であろう。

インタビューの練習では、前もって準備した通りには運ばず、常に調整しながら対話をする必要があることや、聞きたいことを相手から引き出すための質問をすることの難しさについて学生が学ぶことができた。一方で、事実と考えを引き出す質問を区別することや、自分が持っている漠然とした問いを、相手が答えやすいように複数の事実質問に分けて質問することについては、教員のフォローの上、練習の積み重ねが必要である。

表 4 神山塾の塾生との対話

学生	質問とその分類 ()	質問の狙い、意図	相手の解答	対話から学んだこと
A-1	<p>神山の前に住んでいた場所は大都市ですか？ (Fa)</p> <p>東京に住んでいた時、大変だったことはありますか？何ですか？ (Fa)</p> <p>神山のことを最初に聞いたのはいつですか？ (Fa) その時の印象は？ (P)</p>	<p>彼女が生まれ育った場所が都市部か農村部かを知るため。</p> <p>なぜ彼女が都市部から田舎へ移り住んだのか、その背景を得るため。</p> <p>神山のことをどのようにして知ったのか、最初に何を魅力だと感じたのかを知るため。</p>	<p>埼玉県で生まれ東京に引越した。</p> <p>東京は様々なモノや機会に恵まれているから好きだけれど、24時間、365日休みがなくてそこから抜け出せない。</p> <p>初めて知ったのは5年前で、ウェブサイトで見て知った。たかさんの外国人が訪れていることを知って驚いた。</p>	<p>あらかじめ質問を用意していても、その通りに対話が進むわけではない。予想外の解答もあり、自分が知りたいことが直に届かない時は、さらに掘り下げた質問で明らかにする必要がある。</p>
A-2	<p>どんな仕事を体験してきましたか？ (Fa)</p>	<p>これまででこれからの仕事と関係させて、彼女にとつての神山の意義を知るため。</p>	<p>都市部と神山などの農村部の交流に関心があり、それに関連した仕事をしていた。</p>	<p>彼女の人となりや神山について知るには、たくさん質問をしなければならず時間が足りなかった。</p>
A-3	<p>神山以外にも住む場所を検討しましたか？ (Fa)</p> <p>神山を訪問した時の印象は？ (P)</p>	<p>移り住む場所を決める上で彼女の考えや関心を知るため。</p> <p>最初の訪問に住むことの決断に影響しているかを知るため。</p>	<p>徳島県や香川県の小豆島を検討した。</p> <p>美しい自然にあふれていた。人であふれる東京に疲れていたため、人が少ないことも良いと感じた。</p>	<p>対話の流れを遮らないように、1つ1つの質問を関連させることが大切だと感じた。聞いているうちに次の質問が浮かんできたが、まずは相手の答えに集中しようとした。</p>
B-1	<p>神山ではホテルとホームステイ、どちらがお勧めですか？ (P)</p> <p>ホストファミリーは、あなたの滞在によってどんな利益を得ますか？ (Fa)</p> <p>あなたの滞在によって地域はどんな利益を受けますか？ (Fa)</p>	<p>旅や食べ物などの話題は相手をリラックスさせるので、神山の観光開発について知ってもらうため。</p> <p>家賃などの経済面と精神面の双方の利益を知りたい。</p> <p>他のサービス産業の利益など、塾やホムステイが地域に与える影響を知りたい。</p>	<p>高価格のホテル以外の宿泊施設がないので、ホームステイがお勧め。</p> <p>家賃として月に2万円を払う。ステイ先の家族は若者と一緒に時間を過ごせてとても楽しい時間を過ごしている。</p> <p>町ではそれほど買物をしていないので、地域にとつては若者や外国人と交流できるのが最大の良いことだと思う。</p>	<p>考えを聞く質問よりも事実を聞く質問の方が答えるのが大変そうだった。一方で経済的な質問は答えやすそうだったが、文化に関する質問は答えにくそうだった。</p>
B-2	<p>神山塾と地域の関係はどんな関係ですか？ (Fa)</p>	<p>神山塾の地域への貢献や、神山塾が地域から何を求めているかを知るため。</p>	<p>地域では神山塾や塾生を歓迎し、神山にとつて良いことをもたらしてくれるのを期待。塾生は、共同イベントを企画、実施している。</p>	<p>知りたいたいことを引き出す質問の仕方が難しかった。神山のことをもつと知らない質問がしにくい。</p>
B-3	<p>神山でのホームステイの期間は？ (Fa)</p> <p>ホームステイ先ではよく会話をしましたか？どのような会話を？ (Fa)</p>	<p>人間関係は時間と共に変わると考えたので。</p> <p>彼女がどのような関係をホストファミリーと築いたのかを知るため。</p>	<p>その時点で3か月間滞在していた。ルームメイトとステイ先とお母さんとお父さんとの暮らしである。</p> <p>ホストファミリーは、神山にはない、自分が経験してきた新しい話を喜んで聞いてくれる。お互いに重要なことを学んでいる。</p>	<p>事実質問で明瞭な情報が得られた。情報に合わせ、追加の質問を組み立てる必要があった。もつと背景を知ってこれば深い質問ができた。</p>
C-1	<p>神山塾では何の活動をするのですか？ (Fa)</p> <p>神山塾の活動は楽しいですか？ (Fe)</p>	<p>住民が地域の活性化のための労働力として塾生に何を期待しているかを知りたかった。</p> <p>前の質問で、住民の方に失礼なことを聞いて申し訳なかったと思った。</p>	<p>神山塾は、若者が地域に溶け込めるように、塾生と住民が良い関係を築けるような活動を多く行っている。</p> <p>田植えやすだちの収穫などを住民と一緒にできるのが楽しい。</p>	<p>住民は若者が労働力として捉えていると想像していたがそうではなかった。労働力としてよりも、若者の新たな関係が住民を力づけていると知った。</p>
C-2	<p>塾では、どんな社会活動が提供されますか？ (Fa)</p> <p>塾で一番好きな活動は何ですか？ (P)</p>	<p>一般的に学校では座学よりも社会活動の方が面白いので。</p> <p>便利な東京から田舎に移り住むということ、塾の活動が魅力的なのだと考えた。</p>	<p>農作業の手伝いや神山で活動する海外からのアーツイストが住民と意思疎通するための手伝いなどを行った。</p> <p>農作業の手伝いを通して、住民と仲良くなれたのが良かった。</p>	<p>対話は予想外の方向に進むこともあり、質問の仕方を変えることも必要だった。答え手が答えを考えている時は、待つことも大切。</p>
C-3	<p>滞在中、大変なことはありましたか？ どうやって乗り越えましたか？ (P)</p> <p>卒業後の計画はありますか？、他の人にも神山塾をお勧めしますか？ (P)</p>	<p>日本最大の都市、東京から農村部に来て、慣れない生活は慣れなかった経験が人生にも大きな変化をもたらしたと考えた。</p> <p>塾で得た経験やスキルにはどんな可能性があるか、また彼女の神山塾に対する評価を知るため。</p>	<p>最初は全ての住民が歓迎してくれなかったが、距離を取る住民の方もいたし、観察されている気がすることもあった。良い関係を築くために地域の活動にはなるべく参加するようにした。</p> <p>東京で働くつもり。神山で自然に親しみ社会関係を広げられたので、旅をしなから働くような新しい生活スタイルを作りたい。神山を作った米神は若者にも力を与えたい。ぜひ勧めたい。</p>	<p>インタビューの本番前にできれば練習をした方が良かった。また、質問が分かりにくく、質問を2つに分けたらして、話し手の反応に合わせて調整する必要がある。</p>

注) 学生が英語で書いたレポートをもとに筆者が日本語に翻訳して作成。P は Perception (考え)、Fa は Fact (事実)、Fe は Feeling (気持ち) の略である。ABC はチーム名、数字は学生を示す。本文で取り上げた部分を筆者が太字で示した。

表5 対話型ファシリテーションの実践と効果、応用について

学生	対話の実践の内容	対話型ファシリテーションの効果	たおやかプログラムでの応用について
1 文	【自由課題】(自然農法を実践している農家の娘) …父親が行っている自然農法について、育成している作物、売る方法、顧客、自然農法で大変なことについて聞いた。	考えや感情に影響されずに「本当の」状況や課題を見つめるために効果的だと思う。しかし、自分は人々が物事に取り組み時の動機や考え、感情について研究している。相手の課題を見つけないのではなく、主観的な側面を知りたい。すべての研究にこの方法が使えるわけではない。	住民と一緒に地域の課題や解決法について考える時に、参加者が主体的に関わり固定観念を排して見つけられるので、対話型ファシリテーションは、とても役立つと思う。
2 文	【時系列で聞く】(地元の観光に関わる NPO) …瀬戸内芸術祭が地元の観光産業にどのような影響しているかを 2010 年から 2016 年までの時系列で聞いた。	自分では見つけられなかったたくさんの新しい情報を得られた。時系列で情報を得たことで、変化を整理しやすくなったし、自分が出来事を理解したり思い出したりしやすくなった。	課題を見つめるのにとっても有効な方法だと思う。使いこなすには練習が必要。また、地元の方との信頼関係をいかに作るか、現場で観察にもとづいていかに質問を組み立てるのが自分が自分にとっての課題である。
3 技	【改めたい習慣】(クラスメート) …どこにでも車を使って行ってしまおう。健康のために歩きたい。	質問の仕方が良ければ、答える側は心地よいし、進んで協力してくれると思う。	講義を受ける前は現地で住民に課題を聞くのは簡単だと思っていたがそうではなかった。なるべく当事者の立場で考えることが大事だ。技術を作る研究者としてそれが相手の真の幸せにつながるかを考えようと思う。
4 技	【改めたい習慣】(同じ国出身の親しい友人) …喫煙をやめたいという相手に、喫煙している期間や回数、喫煙の悪影響、禁煙によって得られる良い点などを聞き、相手に喫煙について振り返らせた。	対話型ファシリテーションでは、なぜと聞かないことで、対話が迷路に入ることを避けるのに役立つ。今回は、相手の解答を踏まえて一つ一つ、質問を組み立てることができ、講義で練習した時よりもスムーズに対話を進められた。	いきなり直接的な質問を投げかけると相手を困らせてしまうこともあるので、対話を進めながら自分が知りたいたいことに近付いていけるようにしたい。途中で対話が行き詰らないように、相手の背景について勉強したり、対話を行うと同時に状況を俯瞰できるようにすることも大切。
5 社	【改めたい習慣】(同じ研究室の留学生) …日本に米てから夜更かしするようになり、早く起きられない。起床時間について聞いて聞ける相手ができなかったことで整理ができたように、相手の方から「今度会った時に状況を報告する」と提案があった。	講義や課題で対話の練習ができて、聞き手としての自分を客観視できてよかった。もつと忍耐強く聞く姿勢が自分には必要だと思った。Why と聞かない質問法は、課題に関する問いを絞り込み、住民自身の手でボトムアップでの解決策を思いつくことに役立つ。	相手を不必要に誘導しないように気を付け、相手が自分で解決策を思いつくように仕向けたい。地域の課題解決には、その地域への深い洞察が必要。3 月にネパールに行った時に自分の調査でも使ってみて、学生や教員にもシェアしたい。
6 社	【これは何ですか?】(同じ研究室で隣に座っている学生) …自分が見たことのないスマホのアクセサリーを友人が使っていて、その用途や価格、買った場所、メーカーなどについて聞いた。	事実質問を使うことで、リラックスした雰囲気の中で対象についての確に情報を得られる。フィールドワークを行う最初の一步を助けてくれると思う。	why と聞かずに、事実質問を使いこなすには練習が必要。また、調査の準備として前もって情報を入手して目的をはっきりとさせ、何が聞きたいのかを整理して、柔軟に方策を立てるべき。

注) 学生のレポートをもとに作成。英語で書かれたものを筆者が日本語に翻訳した。本文で取り上げた部分を筆者が赤字で示した。

文…文化創生コース、技…技術創生コース、社…社会実装コースの略

2. 実生活での応用と学生の理解

学生の最終レポートでは、日常生活において対話型ファシリテーションを実施し、その内容について報告すること、講義や日常生活での実践を通して感じた、対話型ファシリテーションの効果について記述すること、この対話術をたおやかプログラムの活動や自身の研究で用いるとしたら、どのようなことに気を付けたかを課題として与えた。実施内容の例として、講義で練習した3つのトピックから選ぶか、自由にテーマを設定することとした。

表5は、学生のレポートの一部である。対話の実践ではNo.1やNo.2のように、さっそく専門分野の調査で使ったり、日常生活の中で身近な人物を相手に行った例も見られた(No.3, 4, 5, 6)。講義で学んだことを踏まえながら、日常生活でもある程度応用できるようになったことは成果と言える。

対話型ファシリテーションの効果については、講義における練習において多くの学生が触れたように、質問を組み立てる難しさはあるものの「答える方は心地よい」(No.3)、「事実質問を使うことでリラックスをした雰囲気での確に情報を得られる」(No.6)など答え手の負担を減らすことで的確な情報を得られることに気付いたというコメントがあった。また、質問する側はなるべく自分の固定観念を排除するために、対話を進めつつ、自身の置かれている状況を客観視することが求められる。このことに気付いた学生は、「対話の練習によって、聞き手としての自分を客観視できてよかった。もっと忍耐強く聞く姿勢が自分には必要だと思った」(No.5)と述べている。

一方で、全ての研究にこの方法が使えるわけではないと指摘した学生もいた。No.1の学生は「課題を見つけるには役立つかもしれないが、自分は人々が物事に取り組む時の動機や考え、感情について研究しているので、むしろ主観的な側面を聞きたい」と述べている。

たおやかプログラムでの応用については、技術創生コースでロボティクスの研究をしている学生が「講義を受ける前は現地で住民に課題を聞くのは簡単だと思っていたがそうではなかった。技術を作る研究者として、それが相手の真の幸せにつながるかを考えようと思う」(No.3)と記している。普段はフィールドワークを行わない工学系の学生が現地で課題を見つけることの難しさに気付き、それを踏まえた上で地域への貢献を志しているのは、対話型ファシリテーションの導入の効果であると言える。また、No.1やNo.5の学生は、地域における課題の解決策について、こちらから

誘導するのではなく、住民が主体となって解決に向けて動けるように仕向けて行く上で、対話型ファシリテーションが役立つと指摘している。今後、この対話術を使いこなすためには、「いかに質問を組み立てるのが課題」(No.2)、「相手の背景について勉強したり、対話を行うと同時に状況を俯瞰できるようにすることも大切」(No.4)、「前もって情報を入手して目的をはっきりとさせ、何を聞きたいのかを整理した上で柔軟に方策を立てるべき」(No.6)と、充実した対話を展開するために、訓練を行ったり、前もって現地の情報を勉強して整理をしておくことも大切だとの意見もあった。

IV. 対話型ファシリテーションの講義における導入の効果

1. 大学と地域の連携で求められるファシリテーション

表6は、中野(2003)と本講義での実践をもとにファシリテーションが期待される場と課題について整理したものである。ファシリテーションは様々な場面で求められており、対象や目標によって、求められるスキルや課題も異なる。たおやかプログラムの現地教育の集大成である、オンサイトチームプロジェクトを念頭に、筆者が項目の7を追加した。大学と地域の連携を目指す上で、地域文化創生論の講義の中では、筆者が主にファシリテーターとなり、学生との対話を進めた。一方で、学生が主体となって地域に入り、住民の意向を踏まえながら何らかの活動をする上では、住民との対話という最も重要な役割は、教員だけではなく学生にも課せられる。講義では、教員が教え、学生が教わるという形が通常であるが、大学と地域の連携においては、学生はただ受け身で教わるだけの存在ではない。教員は現地との調整などを手伝うことがあっても、主体はあくまでも学生である。学生のみで現地に行くことが必要な時もあるし、住民を前にして、教員が代わりに対話をしてくれることを待つばかりでは自ら活動を進めることはできない。ファシリテーションは知識を得るだけではなく、実践してこそ意味がある。そこで、ファシリテーションの対象としてだけではなく主体者として学生を記述した。

学生が地域でファシリテーションを行う際の、課題もある。それは、専門分野によって対話の経験が様々なことである。参与観察など地域に深く入り込んで調査を行っている学生もいれば、実験が中心で、住民との対話を経験したことのない学生もいる。そして、専門分野における知識や技術を地域で生かす方法を見つけるためには、現場で何が求められるのかを知る技術

表6 ファシリテーションが期待される場と課題

No.	分野	対象の例	ファシリテーターの例	目標	課題
1	学校教育	児童・生徒	教員	子どもの主体性や創造性を育てる	・参加者の主体性や高い意欲が必要だが、一斉授業では全員が強制的に参加することになり、動機付けが難しい。 ・成績を付ける立場の教員が、いきなり参加者と同じ土俵に立つ支援役になるのは混乱を招く可能性がある。
2	社会教育	住民や学校の児童・生徒	公的機関の職員	生涯学習	・職員が交代で行うだけではなく、ファシリテーションの専門家を育てる制度が必要。
3	NPO/NGO、市民活動	スタッフや会員、ボランティア	スタッフや会員、ボランティア	モチベーションの維持、気持ちの共有	・基本的に良いことをやっているという思いから、独善的になる恐れがある。 ・先鋭化によって新たな差別や抑圧を生み出すこともある。
4	行政	市民	行政の職員	市民のまちづくりや国政への参加	・理念や建て前から具体的な参加や協働の仕組みをいかにつくるか。 ・中立的で専門的な立場の人や組織の育成や活用が大切。
5	企業・ビジネス	社員	外部コンサルタント	持続可能な企業活動の展開	・日本では、経営コンサルはあっても、組織開発や組織変革をファシリテートする仕事はまだビジネスとしては成り立ちにくい。
6	地域活動	地域の住民	地域における世話人	身近な暮らしの充実	・経験豊富で活動経験の長い人が中心になることが多く、頻繁に参加できない人や新しい住民が入りにくいことがある。 ・地域に存在する様々な職業のプロフェッショナルが協力し合う仕組みを作ること。
7	大学と地域の連携	地域の住民・学生	教員・学生	地域の活性化	・専門分野によっては、住民との対話自体を経験したことのない学生もおり、地域の課題を見つけ、貢献するための対話の心構えや意思疎通の技術を得るための訓練の場が大学に必要である。

注) No.1-6は、中野(2003)より作成。7は筆者が新たな項目として追加した。

も必要である。よって大学と地域が連携するためのファシリテーションに関しては、単なる対話の経験だけではなく、目的を踏まえ、現地での自分の立ち位置を的確に把握しながら、情報を収集する技術が求められる。

現地での活動に関する従来の教育では、対話の方法については、現場で実際に経験して学ぶことが求められてきた。確かにそうした技術は、机上の知識だけではなく実践がなければ上達しえないものである。それでも、対話に関する知識がほとんどないままに、学生がいきなり現場に出ざるを得ない現状を鑑みると、対話の心構えや相手と円滑に意思疎通をするための最低限の知識や技術を習得する場を、大学が提供できることが望ましい。

対話型ファシリテーションは、もともと国際協力の活動における形だけの支援や物資のばらまきを避けるための試行錯誤の中で発案されたものであり、対話の先に住民を主体として持続可能な課題の解決方法を見つけることを目指している。その特徴として、お互いの考えや感情はひとまず脇に置いて、事実を整理するための質問を行い、対話を進めることが挙げられる。その成り立ちは図1のように示すことができる。使う疑問詞や質問の形がはっきりと決まっていることが特徴である。そのため、ファシリテーションの経験がな

かったり、地域についての知識が十分でない場合にも、法則にもとづいて訓練を行えば、最低限、現場の状況を事実にもとづいて把握できる。よって、学外で活動した経験の少ない学生や、初めて訪れた地域などで現状を把握する際にも効果を発揮すると言える。

2. 学生への教育効果と今後の課題

本講義では、たおやかプログラムのオンキャンパス教育・オンサイト教育の橋渡しの一助となることを狙って、対話型ファシリテーションの導入を行った。学生たちは、分野融合のチームで地域と関わりながら、課題を見つけ、その解決に役立つプロジェクトを行うという高いハードルを越えなければならない。

対話型ファシリテーションでは、質問する側が、事実を知るための質問に焦点を当てて対話を進めることで、ファシリテーションの初心者が徐々に経験を積み、現場においてある程度の実事の把握ができるように設計されている。

一方で、日常的な会話では事実や感情、考えを混在させて対話をしているため、事実のみを引き出していく質問の方法をスムーズに行うためには訓練が必要である。講義では、3種類のペアワークやグループワークを通して、対話の練習を行った。学生たちは、質問を組み立てる側の苦勞を感じながら、徐々に対話の方

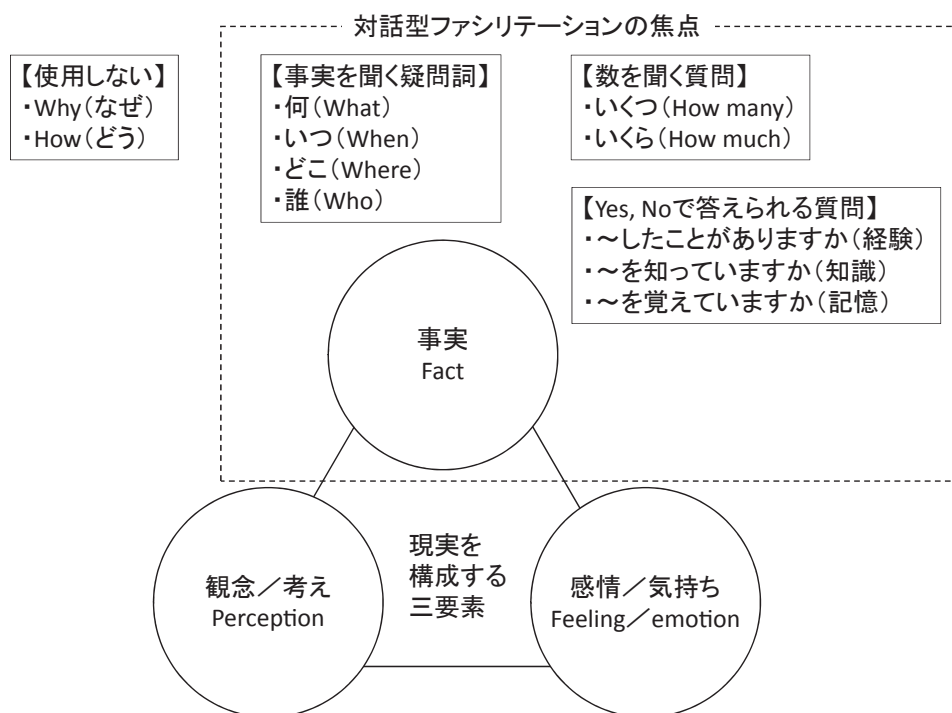


図1 対話型ファシリテーションの成り立ち

注) 和田・中田(2010)の図「現実を構成する三要素」に筆者が加筆

法に慣れていった。

対話の応用編として、徳島県神山町からゲストを招いて行ったインタビューでは、事実質問を使いながら、現地の様子を知ることができた。さらなる応用編として、日常生活における対話において、対話型ファシリテーションを使うことを課題として与えた。講義を受ける前と後とでは、対話において自分の状況を客観視するようになったり、地域で何が課題となっているのか的確に判断することの難しさについて自覚するようになったりと、大きな変化があったと言える。

一方で、学生が質問を組み立てて対話を続けることの難しさを指摘しているように、この対話術を使いこなすには、様々な場面での訓練が必要である。講義だけでは訓練としては不十分であるため、学生の日常生活における実践や、教員のフォローアップがさらにあると良い。また、対話型ファシリテーションは、課題を見つけるのに適しているが、地域を対象とするさまざまな専門分野の研究やフィールドワークにおいて、どのような応用の可能性があるのかについては、検討を続け、教員側も整理をしておく必要がある。例えば、他のファシリテーションの方法と比較して、対話型ファシリテーションの特徴をより明確にし、講義や研修において応用できるようにしていきたい。

【謝辞】

本研究は、文部科学省博士課程教育リーディングプログラム 広島大学大学院たおやかで平和な共生社会創生プログラムの講義である地域文化創生論の実践にもとづいて行った。講義にゲストとして参加して下さった第8期神山塾生の荒木海香さんおよび塾生のみなさん、神山塾との交流をサポートして下さった株式会社レイションの祁答院弘智さんとスタッフのみなさん、対話型ファシリテーションについて講演をして下さった特定非営利活動法人ムラのミライの前川香子さん、講義の受講生、ティーチングアシスタントの森良祐さんに感謝します。

【注】

1) たおやかプログラムウェブサイト <http://taoyaka.hiroshima-u.ac.jp/about-us/taoyaka.html> (2017年12月7日閲覧)

【文献】

石川菜央(2016): 大学院におけるアクティブラーニングの実践と効果的な教育方法—広島大学「たおやかプログラム」における講義「地域文化創生論」を事例に一。広島大学総合博物館研究報告, 8, 1-15.
大南信也(2016): 人をコンテンツにする創造的な地域づくり—徳島県神山町の地域づくりの取り組み—。愛知大学三遠

- 南信地域連携研究センター編：『人をコンテンツにする地域づくり』三遠南信地域連携ブックレット，5-49.
- グロービス（2014）：『ファシリテーションの教科書ー組織を活性化させるコミュニケーションとリーダーシップ』東洋経済新報社.
- 中田豊一（2015）：『対話型ファシリテーションの手ほどきー国際協力から日々の日常生活まで，人間関係をより良いものにするための方法論』認定NPO法人ムラのミライ.
- 中野民夫・森雅浩・鈴木まり子・富岡武・大枝奈美（2009）：『ファシリテーションー実践から学ぶスキルとところ』岩波書店.
- 中野民夫（2003）『ファシリテーション革命』岩波書店.
- NPO法人グリーンバレー・信時正人（2016）『神山プロジェクトという可能性ー地方創生，循環の未来についてー』廣済堂出版.
- 森時彦（2004）：『ザ・ファシリテーターー人を延ばし，組織を変える』ダイヤモンド社.
- 和田信明・中田豊一（2010）：『途上国の人々との話し方ー国際協力メタファシリテーションの手法』みずのわ出版.
- Wada, N. and Nakata, T. (2015): *Reaching Out to Field RealityーMeta Facilitation for Community Development Workers*. Mura no Mirai, Japan.

(2017年8月31日受付)

(2017年12月6日受理)